

術後照射群で12例 (13.5%)、放射線単独治療群で3例 (6.1%) 存在した。

(3) 照射後消化管合併症による死亡が4例 (2.9%) に認められた。

以上より、放射性大腸炎は放射線単独群に多く、腸閉塞や腸管瘻は術後照射群に多く認められた。前者は直腸への被曝線量の多さ、後者は術後の腸管癒着に起因するもので、今後何らかの工夫が望まれる。

17) 婦人科癌における Cyclic Maintenance Chemotherapy の評価

中村 稔・石井美和子
遠間 浩・倉林 工
風間 芳樹・吉谷 徳夫 (新潟大学)
児玉 省二・田中 憲一 (産婦人科学教室)

婦人科癌の進行・再発例に対する寛解導入療法後、寛解期間の延長をはかり、長期予後を改善する目的で cyclic chemotherapy (CC) を行った。対象は、卵巣癌4例 (いずれも III c 期)、卵管癌2例 (II b 期1例, III c 1例) および子宮頸癌再発2例で、原則として直前の化学療法と同じ Regimen を、3ヶ月間隔で2年間行うことを目標とした。卵巣・卵管癌の3例は、寛解導入療法後、臨床的寛解状態 (NED) かこれに近い状態を得た後 CC を行った。他の卵巣・卵管癌の3例は、寛解導入療法後再燃、外科的治療および化学療法にて NED を得た後 CC を行った。子宮頸癌再発2例は、化学療法により CR, PR の効果が得られた後 CC を行った。卵巣癌の1例は CC2 コース後再燃し癌死 (43ヶ月) となったが、4例は担癌状態 (生存期間14~54ヶ月)、3例は非担癌状態 (寛解期間6~22ヶ月) あり、P. S. 0~1 で生存中である。観察期間が短く、長期予後にまでは及べないが、CC は寛解期間の延長および QOL の改善に有用である可能性が示唆された。

18) 甲状腺腫瘍の超音波診断における簡素化の試み

筒井 一哉・佐藤 幸示 (新潟県立がんセンター新潟病院 内科)
佐野 宗明 (同 外科)
長谷川 聡 (同 耳鼻科)

手術で確診した甲状腺腫瘍169例 (悪性81例, 良性88例) の超音波所見を読影し、各種所見の良悪の出現頻度を調べ、診断の簡素化を試みた。良悪の出現頻度をカイ2乗

検定でみると、両者に $P < 0.0001$ の有意差のあった項目は、低エコー、腫瘍内の輝点、嚢腫内乳頭状隆起の3項目が悪性に多く、ハロー、嚢腫形成の2項目が良性に多かった。

超音波診断の簡素化をはかるため、この5項目をスコア化し、その診断能をみた。低エコー+1、輝点+1、嚢腫内隆起+1、ハロー-1、嚢腫形成-1と配点し、各症例の超音波スコアを算出した。+1以上は、悪性81例中70例, 86.4%, 良性88例中12例, 13.6%であった。この超音波スコアの診断能は、感度86.4%, 特異性86.4%, 正診率86.4%と、いずれも良好であった。これらは組織型別でも差がなく、濾胞癌の感度も78.6%と高率であった。

甲状腺腫瘍の良悪鑑別の診断能は、正診率の面でセンチ、ABCを上まわった。

19) 乳癌術後左鎖骨上リンパ節転移に対し 5' DFUR+MPA が著効を呈した1症例

桑原 史郎・岡 至明
鈴木 聡・田中 申介
鈴木 茂・武藤 一郎
渡辺 和夫・西巻 正力
藍沢喜久雄・鈴木 力
田中 乙雄・武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

乳癌根治術後14年目に左鎖骨上リンパ節に再発をきたし、5' DFUR+MPA にて CR を得た1例を経験したので報告する。症例は55歳女性、昭和53年左乳癌にて、拡大乳房切除術 (Br+Ax+Mj+Mn+Ps T1N1M0 stage II) を施行した。術後免疫化学療法を2年6カ月施行し、以後当科外来で経過観察していた。平成4年2月、左鎖骨上の腫瘍を自覚し来院、吸引細胞診にて class V 頸部 US, CT にて 2cm の左鎖骨上リンパ節の腫大をみとめ、乳癌のリンパ節転移と診断した。同時に施行した骨シンチ、胸部 Xp では、骨、肺転移は認められなかった。ただちに 5' DFUR 1200 mg, MPA 1200 mg の投与を開始し、投与後約60日で腫瘍の消失を認め、約90日目に CR と判定した。現在、再発を認めず、投与を継続中である。再発乳癌に対して、5' DFUR+MPA 併用療法は外来で治療可能であり、副作用も少なく、患者の QOL の面からも有効な治療方と考える。